

秋田・新谷地遺跡
しんやち



(本 荘)

古代・中世の掘立柱建物、柱列、井戸、河川などを検出し、須恵器、土師器、須恵器系中世陶器、中国産青磁・白磁、羽口、鉄滓などのほか、古代・中世の木製品が多量に出土した。出土遺物の年代は、古代では九世紀から一〇世紀まで、中

- 1 所在地 秋田県本荘市土谷字新助沢
- 2 調査期間 二〇〇一年(平13)六月～七月
- 3 発掘機関 本荘市教育委員会
- 4 調査担当者 長谷川潤一・土田房貴
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 古代、中世
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要 新谷地遺跡は、本荘市北東部、丘陵突端の沢に形成された扇状地様の高台に立地する。圃場整備事業に伴い、六四五㎡を調査した。

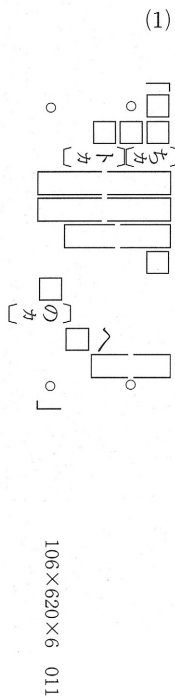
世では一二世紀後半から一五世紀にわたる。木簡は二つの遺構から三点出土した。いずれも共伴遺物などから中世のものと推定される。

井戸SE七七は、上面を削平した後に検出しており、全体の規模などは不明であるが、径約一・六m深さ〇・五八mを確認し、湧水の著しい地点を浅く掘り込み、曲物を井筒としている。木簡(1)はその曲物内から出土した。

土坑SK二五は、長軸一・五二m短軸一・三四m、底面は未検出であるが、深さは一・六m以上、井戸状を呈する。木簡は二点出土したが、うち一点は小さな板状材の破片にわずかに墨痕がうかがえるのみである。木簡(2)は須恵器系中世陶器や曲物、挽物蓋、多量の箸状木製品などともに出土した。

8 木簡の釈文・内容

井戸跡SE七七





〔図カ〕

348×39×4 011

(1)は横長で、四隅に釘穴らしき孔があき、数行にわたって墨書があり、仮名らしき字が確認される。(2)は上下両端が斜めに面取りされ、表面に斜方向の刃物傷が付く。本来は横方向のより大きな板材であった可能性がある。両側面ともきれいに調整されている。表面には二行と推定される墨書、裏面には図様の墨書が認められる。

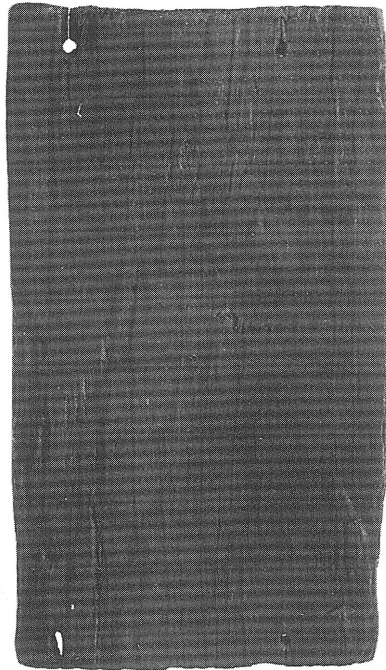
9 関係文献

本荘市教育委員会『上谷地遺跡 新谷地遺跡』(二〇〇三年)

(長谷川潤一)



(2)



(1)

